

2016 年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は 2016 年 6 月 23 日（木）より 8 月 10 日（水）まで実施した。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に 2 年から 3 年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望であり上級日本語の集中的教育を受けることを熱望しながら、様々な事情で年間コースへの入学が困難な学生が多い。そこで、そのような年間コース潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている¹。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段は海外、主に米国で教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、イエール大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、スワスマリア大学、デューク大学の教員が参加した。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度は当初 44 名の参加を予定していたが、コース開始直前にやむを得ない事情による参加辞退が相次ぎ、最終的な受講者数は 39 となった。内訳は、大学院生または大学院入学予定 35 名、リサーチフェロー 1 名、大学新卒生（就職内定）が 2 名、大学学部生 1 名である。受講者は、コース初日の試験により習熟度や得手不得手の傾向が判定され、それに応じて 6 つのクラスに分けられる。各クラスは学生 5～8 名で、それぞれ、1 名の担任と 1

名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち1名は「サマー・レコメンデッド」（年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）であった。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、全てのクラスにおいて、学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材を用いた聴き取りと内容報告の練習、日本語教科書や新聞、雑誌、書籍を用いた読解練習とそれを通じた語彙・表現力の増強、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』(The Japan Times)を用いた敬語の習得訓練が行われる。作文の宿題も定期的に課される。また、日本文化と社会を体験できる機会(校外学習)も5回設けられている。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会を開く。本コースは成績や単位を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行う。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話し、聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるという大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間(校外学習を除く)の中でどの技能にどの程度の時間をかけるか、教材として何を用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が決定している。担任は、教育内容をコース開始前に計画するが、自クラスの学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整を行う。

また、学生1人あたり全コースを通じて1時間、通常授業の時間枠の中で教員との個人授業の時間を設けている。学生1人あたり1時間というのは、教員から見れば授業8時間分ということである(1クラスを学生8名とした場合)。ある学生が教員の指導を受けている時間、他の学生は自習をする。この学生にとっての1時間、教員にとっての8時間をコースの中でどう配分し、その時間で何をするかはクラスの担任がそれぞれのカリキュラムや学生の要望に応じて決定している。例えば後述の「夏鳥」クラスでは1人10分ずつの

面談を5回行い、コース開始時には学習目標の聴き取り、中盤には中間試験のフィードバック、終盤には期末発表のための準備に活用した。

このほか、大学生インターン（大東文化大学、明治大学、横浜国立大学）の協力を得て、授業時間外に自由会話の時間を設けた。学生は週に1回、1～2人が1組となり、授業とは異なって緊張感のない自由な会話を、自分と近い年齢の日本語母語話者と行った。今年の夏期コースでは、インターンの人数等の事情をかんがみ、会話力が弱く、授業以外にも日本語を話す時間を持つことが望ましいと教員が判断し、本人もそう希望した学生のみを対象とした。自由会話に協力してくれたインターン生には、この場を借りて深く感謝を申し上げる。

校外学習の詳細等、上記以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースは2～3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様であり、前節4-1で述べた全クラス共通の活動を行う際、読解教材のレベルや量などはクラスごとに異なる。また、文法の扱い方もクラスにより差がある。本節では、筆者が講師として参加した「夏草」クラスの授業の実際を参考までに挙げる。このクラスは本夏期コースで上から2番目のレベルである。初級～中級までの学習内容が概ね身につく、読解と作文の能力は比較的に高いが、社会的コンテクストに応じた会話能力（敬語、文語、口語の使い分け）は未熟であり、大学院生レベルの高度な議論を交わすには語彙力の低い学生が集まった。基本的な文法ミスが減らすこと、語彙力と表現力を増強すること、学会発表やパネルで用いられるような丁寧でかたい発話スタイルに慣れること、そして、意見陳述、反論、依頼など、相手との社会的関係に応じた繊細な配慮が求められる言語行動を失礼なく遂行できるようになることをクラスの目標とした。多様な専門・関心を持った学生が集まり、ディスカッションやスピーチでは互いに学ぶ所が大きかったようだ。

1 時間目（9:40～10:30）

- ・ミニ発表＋討論：1日1人の学生が2分程度のスピーチを準備し、発表後、質疑応答。
- ・ニュース報告：前日にNHKニュース7を視聴し、各学生が興味を持ったニュースを報告して意見を述べた。話題によってはクラス全体での議論へと発展することもあった。
- ・言葉の使い方テスト：前日の読解授業（2時間目参照）等で扱った単語や表現、文型の読み方、意味、使い方を、口頭での例文の作成を通して確認した。
- ・KIC読みテスト：『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とそのWebアプリケーション版である[WebKIC](#)（注1参照）を学生に自習させた上で、WebKICの機能を使って作成したペーパーテスト（単語を提示して、その読み方を問う）を行った。

2 時間目 (10:40~11:50) 2

- ・ 読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、そこに含まれている重要表現・文型を使って例文を作る練習をした。また、読み物の内容についての意見交換も時間の許す限り行った。読解練習で扱った主な記事は以下の通りである。
- ・ 東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）から一部抜粋
- ・ 河竹登志夫『歌舞伎—その美と歴史—』（国立劇場）から一部抜粋
- ・ 東浩紀「人文系が語るネット」（it.nikkei.co.jp）
- ・ 安部公房「棒」

3 時間目 (12:00~12:30)

- ・ 待遇表現：前述の『待遇表現』テキストを用いた待遇表現の練習と、梁晶子・大木理恵・小松由佳『日本語 E メール の書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた電子メールの書き方の練習。

4 時間目 (13:30~14:20)

- ・ 月曜～水曜：討議責任者（1日1人が順番に担当する）の決めた話題について、クラスで討論を行った。責任者は討論のための資料を準備して自分の見解を発表し（5～10分程度のスピーチ）、討論を主導した。
- ・ 木曜：その週に学んだ語彙・表現・漢字の使い方の復習と、WebKIC の文脈クイズ作成機能を使って作成した書き取りテスト。
- ・ 金曜：校外学習。ただし、授業開始第2週の校外学習は7月6日（水）に行われた³。また、最後の金曜日は通常授業で、試験と口頭発表会のための準備にあてた。

4-3 他5クラスの概略

本節では、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏海」

日常的な会話の交換や一般的な社会問題についての意見陳述は既に十分可能であり、専門書を読めるレベルの読解力も身につけている学生が集まった。自分の専門の分野（あるいはそれ以外も）に関して具体的・抽象的な議論を自在に行える日本語力を身につけることが彼らの目的となる。

ミニスピーチとニュース報告を頻繁に課した上、さらに学生自身の専門をテーマとした長めの発表も数度行わせた。読解学習では市販の日本語教科書を一切使わず、社会学や人類学、民俗学、文学の専門書、さらには歌舞伎の解説パンフレットや短編小説など、幅広い

いテーマ、ジャンルの記事を扱った。1日に授業でカバーした分量は10ページから30ページと非常に多い。他にも、横浜にまつわるテレビ番組を聞き取り教材として用いたり、上級学習者が誤りがちな文法事項(連用中止形の使い方など)を練習したり、前述の『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』と [WebKIC](#) を用いて第6・第7水準の常用漢字を学ぶなど、学生のようなニーズに対応する授業展開を行った。

「夏柳」

プレイズメントテストの結果から、読解力に比して会話力が低いと判断された学生を集めたが、授業が始まってみると読解力の低さが明らかになったので、授業では読み物の内容を丁寧に確認していくことに時間を割いた。読解教材としては上述の『文化へのまなざし』を扱い、中級・上級レベルの読解ならびに文法の学習を行う一方で、本センター作成の『文法ノート』を用いて初級文法の復習も行った。

例年とは異なり、総じて学生の学習スタイルは受動的で、自らの専門的関心に基づいて日本語の技能を高めていこうという能動性はあまり見られなかったものの、教員の指示には良く従い、学生同士の関係も良好だった。特に読解力と作文の能力が伸びたと実感する学生が多かった。

「夏山」

会話力に比して読解力が低いと目される学生を集めたが、学生の高い意欲と能力をかみ、読解教材の難度を下げない方針を採った。アカデミックジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』(アルク)や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌や・書籍から抜粋した記事も含む読解課題に加え、担任が独自に編集したテキストによる初級文法の復習、テレビ番組の視聴など、学生への要求の高いカリキュラムであったが、学生はよく教員の期待に応えた。期末発表会でも授業で学んだ表現を流暢に使いこなし、努力の跡を印象付けた。

「夏鳥」

夏鳥クラスの学生の日本語能力は総じて初級修了から中級初期程度といえる。基礎を固め、その上に高度な日本語運用能力を積み上げていくことが本クラスの目的である。

文法のテキストとして、本クラス独自の文法・表現パッケージを用いた。読解の授業では、岡・筒井・近藤・江森・花井・石川『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』(くろしお出版)、先述の『留学生の日本語③』のほか、学生が自分の専門に応じて選んだ記事や小説などの生教材も用いた。

学生たちは真摯で意欲的であった。期末発表も教員の手厚い指導のもとで準備に時間をかけ、ほとんどの学生が高度な内容を破綻なく発表することができた。

「夏空」

本クラスでは、学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足が顕著であり、基本文法を用いた単文が正確に産出できるようにすることを最大の目標とした。学生数を5名に絞って手厚い指導ができるよう、また各学生の発話時間をできるだけ確保できるよう配慮した。

文法の授業のためには友松悦子『初級日本語文法総まとめポイント 20』（スリーエーネットワーク）、読解の授業のためには『留学生の日本語①』とスリーエーネットワーク『中級を学ぼう 中級中期』を用いた。また、『留学生の日本語①』は会話や作文の指導にも活用した。

教員は期末発表会に向けての原稿修正や発表の指導に非常に苦労したが、学生は何とか自らの専門や関心の対象を日本語で論じたいという意欲を最後まで維持し、練習を重ねた。その結果、当日はどの学生も流暢に発表し、7週間の学習の成果を示した。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートからは、教育内容と教職員に対する高いレベルの満足度が伺える。33名の回答者のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者は18名、Good とした者は15名、Fair あるいは Poor とした者はゼロであった。また、33名が本コースを他の学生に推薦する意志を表明している⁴。校外学習に対する満足度もきわめて高い。

一つ特筆すべきことは、大学生インターンへの感謝のコメントが多かったことである。彼らは放課後の会話パートナーとして学生の気軽な話し相手になってくれただけでなく、校外学習への付き添いや授業活動への積極的な参加を通じて学生と良好な関係を構築した。勉強に追われ、ともすれば塞ぎ込みがちになる学生に活力を吹き込んでくれたインターン諸氏の貢献は、今年度夏期コースを総括する上で欠かせない要素である。

一方、コースに関して具体的な問題点の指摘や建設的な提案も寄せられ、考慮に値する課題、あるいは早急に改善すべき点がいくつか見出された。例えば、本センターでは学生と教員の間でのデータのやり取りと共有に Google Apps for Education を活用しているが、その利用方法や目的のファイルにたどり着く手段が複雑であり、混乱する学生がいたようだ。コース開始時のオリエンテーションでの丁寧な説明や、共有ファイルのフォルダ構造の整理が必要だろう。

6 おわりに

今年の夏期コースは大きい問題もなく終了したといえるが、校外学習に関しては歌舞伎教室と「鎌倉の日」について例年と異なる事情があったことに加え、深刻な事態に発展しかねない状況もあった。

本コースでは校外学習を金曜日に行うことにしているが、今年の歌舞伎教室は、教室開催日程の都合上、水曜日に行われた。これについては「水曜日の校外学習は次の日の授業準備が大変」との声が学生から上がった。やむを得ないこととはいえ、学生にとってやや苦しいスケジュールとなったことは否めない。

「鎌倉の日」は午前中がクラス単位での自由行動となるため、学生が日本での生活に慣れ、互いに気心が知れてくるコース中盤以降に行うことが望ましいと考えられるが、今年は、座禅教室の開催スケジュールとの兼ね合いで授業開始第1週での挙行となった。しかし、当日はクラス単位での活動も全体での座禅研修も滞りなく進行し、混乱なく一日が終わったことは喜ばしい。

「横浜の日」が挙行された7月15日、関東地方はいわゆるゲリラ豪雨に襲われた。大雨警報が気象庁によって発令され、センター周辺でも降雨の激しさは歩行もままならないほどとなった。この中を徒歩であるいは電車で出かけていった学生と引率者には幸い何事もなかったものの、警報が発令されるほどの悪天候では校外学習を中止し、安全な校内での活動に切り替えるべきであった。本コースでは、早朝時点での悪天候またはその恐れによる休校措置とそれに関わる手続きは既に定めていたが、この「横浜の日」を機に、授業開始後の天候悪化による授業ならびに校外学習の中止措置も定められた。

毎年ここで述べていることだが、筆者は「7週間、とても勉強になった。しかし、もっと勉強が必要だと分かった。次はぜひ年間コースに参加したい」という感想を学生が持つことが夏期コースの最大の成功だと考えている。ありがたいことに、今年も多くの学生が年間コースへの参加希望を表明してくれた。

今後も、優れた学生のニーズを満たす密度の濃い教育と、校外学習等諸活動の充実を追求していく所存である。

(あきざわ ともたろう / 2010～2016年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目である SKIP (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは行わなかった。学生には、授業以外にもし時間があれば、本センター発行の『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とその Web アプリケーション版である [WebKIC](#) を用いて常用漢字の学習をするよう勧めた。これらの漢字学習教材は、後述の夏海クラスと夏草クラスの授業でも一部用いられた。
- 2 夏草クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2時間目の授業時間を延長し、逆に3時間目（待遇表現）を短縮した。
- 3 稿末の資料参照。
- 4 ただし、うち3名がコメント付き：「I would recommend it with some reservations.」「for some people」「Depends on the other students language ability and learning goals」

資料：2016年度夏期コース 校外学習等

6月

- 23 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験 (筆記、聴解、発話) (9:40~12:00)
- 24 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練 (9:40~12:30)、歓迎会 (12:30~14:30)
- 27 (月) 授業開始

7月

- 1 (金) 校外学習① 鎌倉の日 午前中はクラス毎に鎌倉見学、午後は建長寺にて座禅研修
- 5 (火) フロリダ国際大学エイミー・マーシャル助教授 (IUC'08年間コース卒業生) との懇談会
- 6 (水) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「卅三間堂棟由来」
- 15 (金) 中間試験 (9:40~12:30)、校外学習③ 横浜の日 5班に分かれ横浜市内を見学
 - A. 横浜地方裁判所、B. 森永鶴見工場、C. 神奈川近代文学館、D. 海外移住資料館、E. 三菱みなとみらい技術館
- 22 (金) 校外学習④ 東京の日 4班に分かれ東京を見学
 - A. 国会議事堂、B. 東京国立近代美術館、C. アド・ミュージアム東京、D. 明治神宮
- 29 (金) 校外学習⑤ クラス単位で自由行動

8月

- 8 (月) 最終試験 (9:40~12:30) 午後は発表会準備
- 9 (火) 口頭発表会 (9:40~14:20)
 - 1人あたり質疑応答を含め15分、3箇所に分かれ同時開催
- 10 (水) クラス担任との個人面談 (9:40~12:30)、修了式と祝賀会 (12:30~14:30)